

# 明治維新とハプスブルク家

新井 宏

ヨーロッパの美貌を代表するのは、ルイ十五世の愛妾ポンパドゥール侯爵夫人と皇妃エリザベートであろう。

その美貌と知性と才能によって、フランス宮廷に大サロンを形成し、十八世紀のヨーロッパの政治を動かしたポンパドゥール侯爵夫人は、女性の円熟した魅力をその肖像画によってあますところなく伝えている。

一方、ハプスブルク家フランツ・ヨーゼフ一世の皇妃エリザベートは、あまりにも美しく、かえって暖か味に欠け、憂いに包まれた印象を与える。彼女の満たされなかった生涯を暗示しているかのようである。

先日、森実与子さんのご著書『エリザベート・美と旅に生きた彷徨の皇妃』を読んでいて、ちよつとびつくりした。一八七三年(明治六年)六月八日のシェーンブルン宮殿における岩倉遣欧使節団の晩餐会で、岩倉具視がエリザベートの隣に座ったというのである。皇族でも首相でもない岩倉に対しては大サーピスである。しかし、久

米邦武の『米欧回覧実記』には当日のパレードや謁見については伝えるが、晩餐会の様子は記さない。

もつとも、この年のウィーン万博には「文明国日本」を世界に訴えるため、分不相応な費用をかけて参加し、米国が二つしか獲得できなかった栄誉賞を五つも得ていたのであるから大サーピスの素地はあったのかも知れない。

そう言えば二十年ほど前に『オーストリア外交官の明治維新』という本を読んだ記憶がある。あまり知られていないようであるが、明治維新を理解するには絶対に推奨できる書である。

著者ヒューブナー男爵は華麗な外交官生活を終えて、世界周遊に出て一八七一年(明治四年)夏に来日し二ヶ月半ほど滞在している。若い頃はメッテルニヒの腹心で、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の側近、クリミア戦争を最終するパリ条約ではオーストリア全権として署名してお

り、警察大臣も務めた引退外交官である。その頃までの幕末維新期の日本で活躍した英国パークスらの外交官に比べたら超大物であり、文人歴史家としても大著「シクストゥス五世伝」を残している。

この辺で、オーストリアと明治維新の歴史について関連つけておくのも悪くない。そんな気持ちで、調べはじめてみたところ、かなり手応えがある。

明治維新の始まった頃のハプスブルク家は、イタリア統一戦争によりイタリアから追放され、一八六六年に起きた普墺戦争でプロイセンに大敗し、ドイツ盟主の地位をプロイセンに譲り渡し、ベネチヤ地方もイタリアに譲り渡さざるを得なくなっていた。

その結果として、ハプスブルク家は、ドナウ川流域の支配に専念することになり、一八六七年に「オーストリア皇帝」と「ハンガリー国王」を政治的に統合し、軍事・外交および財政を共有する「オーストリア・ハンガリー二重帝国」を作っている。

この年、日本では王政復古の号令が出され、明治維新が始まる。

皇妃エリザベートこと「シシー」は、姑ゾフィー大公妃との不和などがあって、心身症を患い、公務を避けてウイーンを離れることが多く「彷徨の皇妃」と言われて

いた。それゆえ、ブタペストに滞在することも多く、マリア・テレジアに似て、ハンガリーの風土や文化を愛すようになり、恵まれた語学の才によって、ハンガリー語にも通じ、反ハプスブルク的なハンガリー人（マジヤール人）の心さえつかむほどハンガリーでは人気があった。オーストリア・ハンガリー帝国の成立に際しても、衰退するハプスブルク家から離脱しようとするハンガリーをくい止めるために奔走し、帝国内にとどまらせた功績者はエリザベートであった。ブタペストには彼女の名をつけたエリザベート橋がある。

岩倉具視が会った頃のエリザベートは、姑ゾフィー大公妃が亡くなった翌年で、ウイーン万博を訪れる各国元首級を迎える公務も、ある程度こなしていた。各国の使節は、万博はそこそこのことにして、美貌のエリザベートに会うことを楽しみにしていたという。三十五歳、冷たさの中にも、美しさに円熟味を増していた。

もはや昔日の強盛を誇るハプスブルク家ではなかったが、それでも外交面や文化面でウイーンはヨーロッパの中心地であった。そのハプスブルク家が明治維新に全く登場しないはずがない。そんな想いでヒューブナーの『オーストリア外交官の明治維新』を再読する。

ヒューブナーが、引退を機に日本に滞在したのは一八

七一年(明治四年)の七月末から十月初である。それは、ちょうど廢藩置県が断行された時期であった。

引退はしていたが、大物外交官であった経歴から、英国公使館は休暇で不在のパークス公使に代わり、代理公使アダムスらがつきつきりで世話をしている。

まずは、天皇拜謁のために、沢宮嘉外務卿に会うが、数日後に岩倉具視がその後を継ぐことになり、その後は、岩倉具視にしばしば会っている。その際、折からの「廢藩置県」について突っ込んだ議論をしているし、後の岩倉遣米欧使節団の構想についても話し合っている。また、西郷隆盛や大久保利通、三条実美、そして徳川慶喜にも会っている。

九月十六日、外国民間人としては初めて天皇に拜謁するが、その際にも、太政大臣三条実美以下、岩倉具視、木戸孝允、大隈重信、板垣退助らの政府高官が同席している。いわば、明治維新の主要人物には全員会っているわけである。

ヒューブナーが目にした廢藩置県は、封建組織を一挙に解体する大胆果敢な政策であり、その急進性ゆえに「茫然自失」の内に日本人に受け入れられ、ヨーロッパ人たちも「喝采」を送ったのだと分析している。「茫然自失」であったのは、起死回生の手段として、やむなく改革を断行した当事者さえ同様であったと後世の歴史家たちも言っている。

このように、ヒューブナーの日本観察は、その後の歴史進展を知る我々にとつて、的確であり新鮮である。しかも、うれしいのは、随所に見られる文明評論的な日本賛美である。箱根や富士山を訪れ、京都では御所や伏見城を、そして長崎を経て出国するまで、目に映った日常を述べるばかりでなく、建築・彫刻・絵画を論じ、貿易統計に触れるかと思うと、四十七士の物語を詳しく紹介したりしている。

ヒューブナーは宝塚ミュージカル「エリザベート」に敵役で登場しているようであるが、ブリデッキ・ハーマンの『エリザベート』には、彼の日記がたびたび引用されている。そこに見るヒューブナーは、皇帝側近だった経歴によってか、エリザベートに批判的で、ゾフィー大公妃の死に際しては、皮肉を込めて「宮廷の伝統を尊重し、その大切さを理解している皇帝家の成員にとつては、(ゾフィーの死は)皇室にとつて大きな損失である」と書いている。この時、ヒューブナーは世界一周から帰国したばかりであるが、肩書きが男爵から伯爵となつている。

ところで、ヒューブナーが来日する前の一八六九年明治二年末に、実は、日本はオーストリア・ハンガリー帝国と「不平等条約」を結んでいる。安政五カ国通商条約に便乗された条約であるが、ここで日本側は大変なミス

を犯した。これを主導したのが英国の駐日公使ハリリー・パークスである。

パークスは安政五カ国条約で不明確であった規定を整備するためオーストリアに力を貸したのである。しかしそれはもちろんオーストリア・ハンガリー帝国のためではなかった。

この条約は、外国人裁判権、治外法権、極めて低い関税に関する規定を有し、オーストリア・ハンガリー帝国にとつては非常に有利、日本にとつて最悪な「修好通商航海条約」であった。その上、それまで日本と条約を締結していた他の全ての列強は、「最恵国約款」に基づき、同じ特権を自動的に手に入れることができたのである。そのため、日本の不平等条約改定問題は、その後、形式的にはこの「修好通商航海条約」の改定に向けられることになる。

当時、「東洋」はオーストリア・ハンガリー帝国にとつて抗う事のできない魔力を持つ言葉であった。英・仏・米の強請によつてはじまった東洋との交易はスエズ運河の開通によつて頂点に達していた。オーストリア・ハンガリー帝国も、経費の安い輸送航路の利用で、この大きな市場への参入を期待していた。

エリザベートをして岩倉具視をもてなしたのも、ウィーン万博の他に、そのような背景も影響したのかも知れ

ない。そしてそこには旧知のヒューブナーの役割もあったのではなからうか。

次に、オーストリアが登場するのは伊藤博文のスキヤンダルである。

歴代首相の中でも、もっとも派手に女性と遊んだ人物はだれかと問われれば文句なしに伊藤博文となるが、このスキヤンダルはさすがに彼の政治生命にも影響を及ぼすものであった。

時は鹿鳴館時代の一八八七年(明治二十年)四月、英国公使主催によつて、伊藤首相官邸で始まった仮面舞踏会が終わつてから一週間位たった頃、東亜新聞は伊藤博文が岩倉具視の娘である戸田氏共伯爵の夫人極子とその晩に何かあったと云うスキヤンダルを大々的に報道したのである。場所と時間まで示したかなり詳細な報道を見て、政敵ばかりでなくキリスト教系女学生まで怒りを爆発させた。しかも、戸田伯爵夫妻はその直後、伊藤博文の推薦によりオーストリア公使に抜擢されウィーンに赴任するのである。伊藤博文は当時四十七歳、伯爵夫人は濃艶な姿を誇る三十歳であった。

事実、鹿鳴館時代を代表する戸田極子は、陸奥宗光の夫人亮子と共に、清楚でかつ艶やかで愛くるしく美しい。岩倉具視の娘にしては、側室・まきの方がよほど美しいのであろう。

一八七〇年(明治三年)、僅か十四歳で旧大垣藩十万石の藩主の戸田氏共に嫁ぐが、夫は欧米に五年間の留学に出てしまい、婚家に置き去られ、舅姑の許で、琴、華道、茶道等の稽古に勤しんでいた。

戸田氏共は、鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍の先鋒として参加したが、この後、家老の小原鉄心の説得を受け、兵を率いて上京帰順し、急転直下、岩倉具視の長男具定の指揮下に入り、東山道鎮撫軍の主力として宇都宮・会津の戦いに参加している。そのため、明治維新の樹立に際して、大垣藩は長州藩・薩摩藩・土佐藩に続いて多くの賞典禄三万石を得ている。

岩倉具視の娘を迎えたのも海外留学に出たのも、そんな背景があったからである。

米国では鉱山学を学び、帰国してからは工部省鉱山局に勤めていたが、一八八二年(明治十五年)に憲法調査のため渡欧する伊藤博文に随行して、外交官への道を進む。

一八八三年(明治十六年)、英国の若き建築家コンドルの設計に成った鹿鳴館では、外国からの賓客や外交官を接待するために、伊藤博文の夫人梅子の指揮により、華族や高官の夫人たちが、洋風を装い、洋酒洋食を饗し、舞踏会を催し、にわか仕立の社交界を形成していた。極子はその美貌と教養から瞬く間に社交界の華となる。

仮面舞踏会の衣装は、伊藤博文がヴェネチアの貴族、外相の井上馨が三万石、山田顕義が吉備真備、渋沢栄

一が弁慶、山県有朋が奇兵隊軍監、戸田夫妻は太田道灌と山吹を手向ける賤の娘の衣装であったという。かなり珍奇で涙ぐましい努力であったにちがいない。

スキャンダルの事実関係については諸説あるが、この事件報道の直後、夫の戸田氏共がオーストリア公使の西園寺公望の後任として勅任官二等に昇進したことを根拠に挙げている者もいる。しかし、西園寺公望も戸田氏共も伊藤博文が期待する人材であり、人事的には異例とは言えない。

また、国会図書館には、事件に関する密偵の三島警視總監あての報告が残っているが、これも「噂の集成」の域を出ない。伊藤博文や井上馨の長州閥を追い落としのため、薩派の仕組んだ情報戦であったと見る者が多い。事実、この事件の直後に、黒田清隆内閣が成立している。

しかし、林真理子が『ミカドの淑女』で描いたように、伊藤博文は明治の紫式部・華族学校校長「妖婦下田歌子」とも関係があった。開けっ広げにプロの女性とばかり遊んでいたわけではない。

あるいはと思わせるのは、三十年ほど前に出版された極子の孫・徳川元子の著「遠いうた」に、次のようであるからである。

……好色の名の高かった伊藤博文は、三十歳といふ女盛りの美しい祖母に目をつけて、仮面舞踏会が

催されたある晩、祖母を一室に誘い、狼藉に及ぼうとしたのでした。祖母は驚いて開いていた窓から飛び降り、はだしのまま庭を駆け抜けて、辻待ちの人力車で逃げ帰ったそうです。この話は醜聞として有名になり、祖母はその生涯大迷惑を蒙りました。

……(千円札の博文の肖像を見る時)、祖母の語った事の真相を信じているだけに、ひとには語れぬ感慨が湧いてきます。

ちなみに、元子の曾祖父の岩倉具視は「五百円札」であった。田安家の徳川伯爵夫人としては、くだけた表現であり、これが極子からの直接の聞き書きであったことを同わせる。煙のものはあったのかも知れない。

そして想うのは、使節団副使として、岩倉とともに晩餐会に出席した伊藤博文は、ヨーロッパの美貌・エリザベートをどのように見たのであろうかということだ。

さて、ウィーンに赴任した戸田極子である。当時の公使館は、あまり豊かでは無かったようで、客の饗応の費用に、花瓶などの装飾品を売って間に合わせたこともあるという。四人の子供を連れての赴任であった。

以下は、主としてインターネット「それは音楽より始まった」(<http://mydisc.cocolog-nifty.com/>)からの引用である。

昭和六十年頃のことであるが、ウィーン楽友協会が所

蔵するブラームスの遺品の中に一冊の本が発見された。それはハインリッヒ・フォン・ボクレットによる『日本の民族音楽』で、日本の民謡をピアノ用に編曲した楽譜集である。表紙に「ウィーン駐在日本帝国公使戸田伯爵に謹んで献呈」と印刷されている。

注目すべきことは、この発見された楽譜にブラームス自身が鉛筆で書き込んだメロディーやハーモニの訂正箇所が多数見られることである。それはブラームスがこの楽譜を、原曲の音と照らし合わせながら、加筆修正を行ったことを示している。

この楽譜集を出版したボクレットは、当時、ピアノ教師としてウィーンの上流階級の間でよく知られた音楽家だった。彼はオーストリア公使の戸田伯爵家子女の教師をしていたといわれるが、そこで彼は日本の伝統音楽に出会うことになったのである。

極子は、幼いころから山田流箏曲をたしなみ、その腕前は折り紙つきであったと伝えられている。極子の演奏する箏の音色を、ボクレットが採譜したことは想像に難くない。「宮様」「ひとつとや」「春雨」「六段」「みだれ」の五曲からなり、出版当時「ウィーン新音楽時報」の書評欄で、絶賛されたという。

よく知られているように、ブラームスは、「ハンガリー舞曲集」や『ドイツ民謡集』などを作って、生涯にわ

たつて民族音楽に強い興味を示していた。だから、この『日本の民族音楽』にも強い興味を抱いたものと思われる。

ブラームスが極子の「六段」などを聴いたのは、楽譜集が出版された一八八八年(明治二十一年)から、戸田伯爵夫妻が帰国する一八九〇年(明治二十三年)七月までの間になるが、その頃、ブラームスは晩年になって再び作曲に意欲をもちはじめていた。

ところで「六段」は、昨年六月の「題名のない音楽会」で紹介されたところによると、グレゴリオ聖歌「クレド」に良く似ているという。日本伝統音楽には珍しく純楽器的な演奏で、「主題と五つの変奏曲」とでもよぶべき形式で構成され、十六世紀スペイン風と呼ばば「六つのデイフェレンシアス」すなわち「六段」である。この「六段」のヨーロッパへの里帰りをブラームスはどのように聴いたのであろうか。

ブラームスと一緒に撮影した戸田夫妻の写真がベルリン国立公文書館に現存している。

そのような関係であろうか、戸田公使はヨハン・シュトラウスを音楽学校の先生として日本に招聘する計画を立てたという。しかし、この計画は成就せず、ブルックナーの弟子ルドルフ・デイトリッヒが招聘され、日本における西洋音楽育成の基礎を築いた。

戸田氏共は後に式部長官を勤める。

ちょうど、戸田夫妻がウイーン公使として滞在していた一八八九年(明治二十二年)、オーストリア皇太子ルドルフがマイヤーリングで情死する事件が起きた。プレイボーイの面を持つルドルフであったが、リベラルな知性が王権神授説に固まる父フランツ・ヨーゼフ皇帝と合わなかったことに遠因があった。それは母エリザベットのウイーン宮廷に向けた批判精神を受け継ぐものでもあったが、ハプスブルク家は後継者を失ってしまった。

そのため、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世は弟カール・ルートヴィヒの三人の息子から後継者を選ばざるを得なくなつた。しかし、ひとりには平民の娘と結婚していたため除外され、もうひとりには漁色が過ぎて性病にかかり、結局、長男のフランツ・フェルディナンドを皇位継承者として認定した。

しかし、フランツ・フェルディナンドにもチェコ平民の恋人ゾフィー・ホクテがいることが判明し、ウイーン宮廷は二人の結婚に大反対したが、フェルディナンドは、若くもなく美人でもなく、背も高すぎ瘦せていたホクテとの愛を貫き通した。結局、皇帝はホクテに皇族としての特権をすべて放棄させた上でやつと結婚を認めた。

このフェルディナンド皇太子が、後にサラエボの町でセルビア民族主義者により暗殺され、オーストリアがセルビアに宣戦布告、第一次世界大戦を引き起こすことになる。

さて、この新たな皇太子フェルディナンドは、一八九三年(明治二十六年)に日本に来て『オーストリア皇太子の日本日記』を残している。

この頃、日本は鹿鳴館時代に始まった不平等条約改定交渉の山場にさしかかっていた。しかも、形式的とはいえ、オーストリア・ハンガリー帝国との修好通商条約こそ、日本が最初に改正を熟望したものであった。そのため、日本政府としては、皇太子の迎入れを絶好の機会と捉え、涙ぐましいほどの努力をしている。それは、その二年前のロシア皇太子襲撃事件(天津事件)の再発は、国としての致命傷となる事情もあった。

フェルディナンドとしては、「お忍び旅行」を希望していたが、日本側にはそれを受け入れる用意がなかった。ただ、岐阜では長良川の鵜飼いをわざわざ見物している。大垣藩主であったウイーンの戸田公使に聴いていたのかも知れない。

フェルディナンド皇太子は、絶頂期を過ぎて崩壊に向かう歴史で現れる人物の典型であった。意志が強く、狷介なところがあり、繊細で尊大でありながら、一方で弱者へのいたわりの目を持ち、趣味に没頭するなど、旧体制の皇帝から疎まれる要素を持っていた。

彼の日本日記は、ヒューフナーに劣らず、鋭い観察に満ちている。大阪の砲兵工廠では、最新鋭の機械により、

山砲から要塞砲までが短時間の内に加工され、弾丸も大量生産されている様子を自身の目で確認し、きわめて短時に日本がヨーロッパ兵器製造に習熟している事実を驚いている。この砲兵工廠ではポルトガル向けの山砲まで作っていた。

またフェルディナンド皇太子は、好んで観兵式に臨み、日本の近代化がいずれヨーロッパ諸国に脅威になることを予測している。それは翌年の日清戦争から、義和団の乱、日露戦争と続く歴史によって証明される。

横浜では大シーボルトの次男、小シーボルト(フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト)が皇太子の案内をしている。小シーボルトは、この時、オーストリア・ハンガリー帝国の横浜領事代理を務めていた。モースと共に大森貝塚の発掘を手がけたり、外交官の地位の関係で欧州からの王族の日本観光に随行し資料蒐集に関わったりしたことが後のジャポニズムブームの起点にもなったという。

彼は大シーボルトの学術面の才能をよく引き継いでいた。蒐集癖のあるフェルディナンド皇太子にとっては、最高のパートナーであったが、残念ながら横浜には望む物品がなかった。

サラエボに消えたフェルディナンド皇太子は、来日中に蒐集した一万八千点の美術品を持ち帰り、ウイーン民

族学博物館の日本部門を開設している。

ついでながら、この時、オーストリア・ハンガリー帝  
国の駐日代理大使はボヘミアとハンガリーに跨る広大な  
領地をもつ伯爵クーデンホーフであった。彼はその前年  
に来日し、牛込納戸町の公使館近くに住む美少女の青山  
みつ(光子)を見初め、あつという間に結婚している。こ  
れが正式な記録に残る日本の国際結婚の初めであった。

この正式結婚も「日本がもはや野蛮国」ではないこと  
を国際社会に示す良い例となり、不平等条約改定に大き  
く寄与した。光子は皇帝フランツ・ヨーゼフ一世に拝謁  
する初めての日本人女性になるが、七人の子供をもうけ  
夫の死後、膨大な資産を受け継ぐ。

フェルディナンド皇太子来日の翌年、日本は陸奥宗光  
によって英国を不平等条約改定のテーブルにつかせるこ  
とに成功し、日清戦争に勝つて国際社会に踊り出る。

ここで明治維新が終わる。